
異聞 坏戸シティホテル事件

ヤン=ミンツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異聞 坏戸シティホテル事件

【Nコード】

N0388Q

【作者名】

ヤン＝ミンツ

【あらすじ】

時間犯罪者によって、杯戸シティホテル事件の流れが変わってしまい、灰原哀は死亡。タイムパトロールは、歴史を修復するため非常手段を取る。死亡寸前に緊急回収した彼女が蘇生するまでの間、彼女の子孫の一人である見習い隊員を代役に立てるのだ…。

タイムパトロールの設定は漫画「TPぼん」と小松左京氏と同じく日本SF第一世代の豊田有恒氏の時間SFのものを参考にしています。

1 時間犯罪発生

ここは、西暦23世紀、緑地化されたかつてのタクラマカン砂漠にある、タイムパトロール・センターである。過去の世界にタイムマシンで出かける時間旅行者を守るタイムパトロールの本部になっている。

この本部の監視セクションでは、時間旅行者たちが出かけている時代の状況を適宜、タイムカメラで映し出して歴史の流れに異常がないかチェックしている。

突然、20世紀末の極東エリアを監視していたタイムカメラの一つが時間流の異常を感知して警報のサイレンを鳴らした。

「1999年 杯戸町にて歴史改変事件発生。」

タイムカメラのモニターにはぐったりした茶髪の少女を抱きかかえて、半狂乱に呼びかけている少年の姿があった。

1 時間犯罪発生（後書き）

原作、アニメにおいて主要な事件である「黒の組織との再会」の周
囲で時間犯罪がもしもあつたら？という設定です。

2 199X年 タイムパトロール支部 - 1

199X年極東エリアにあるタイムパトロールの支部では、隊員たちがほかの時代の支部に連絡を取ろうと躍起になっていた。

「まだ連絡はつかないのか？」

「時間流の乱れが大きくて、21世紀以降の支部には連絡が付きません。過去の時代の支部との連絡は可能です。」

タイムカメラのモニターには時間犯罪が行われた現場が映し出されていた。

酒蔵代わりに使われていたホテルの一室で火事が起きている。その場に不釣り合いな二人の子供の姿があった。

清掃員用のツナギをぶかぶかに着ている赤みがかった茶髪の少女は、もう息がない。体の何か所か銃で撃たれたような怪我があり痛々しい。そのうちの一つが「本来の歴史」ではあり得ないはずのものであった。

「灰原つ、おい灰原つ」

少女の体を揺すりながら、名前を呼び続ける少年は、部屋が焼け落ちる直前に、「本来の歴史」では

深手を負った彼女を背負いつつ脱出したドアから一人出ていった。

「支部長、あの茶髪の少女をターゲットにした時間犯罪のようです。悪いことに現場に居合わせた少年ともども、歴史の大きな流れに影響しているようです。」

歴史には本来、自力で修復する力があり、ささやかなものであれば、知らず知らずのうちに元々の流れに戻すが、より大きな力が加えられた時、徐々に元々の流れから外れ、「別の歴史」の流れが発生して、やがて「本来の歴史」にとってかわる。今回は時間犯罪により「別の歴史」が作られかねない状況のようだ。

「少年が灰原と呼びかけていたようだが？」

「それは偽名の灰原哀ですね。本当の名前は宮野志保で、今は幼児化しています。データをより詳しく知るのに機密解除コードが必要です。」

「それじゃあ、あの少年は？」

「江戸川コナン 本来なら高校生探偵の工藤新一の幼児化した姿です。」

江戸川コナンと灰原哀、二人は未来において一部の人しか知らない機密の中にあり、二人の情報へのアクセスは制限されていた。

二人は20世紀末の犯罪組織の一つ「黒の組織」で開発中の薬物APT X 4869を飲んで、偶然幼児化したとはいえ生き残ったとしても機密解除前のデータではわからなかった。

「データの機密を解除してより詳しく出せ」

「本来の歴史と違った別の歴史の流れができつつあります。別の歴史の一つを捉えました。」

歴史が改変された後の時間の流れを追っていたタイムカメラの一つは「別の歴史」を歩みつつある

コナンを姿を映していた…。

2 199X年 タイムパトロール支部・1（後書き）

初めての投稿作品です。頭に浮かぶことを文章にするのは結構難しいですね。

さて次話では「命がけの復活」あたりまでの改変されてしまった歴史が書ければと思います。

3 199X年 タイムパトロール支部 - 2

タイムカメラは灰原亡き後の本来ありえるはずのない「別の歴史」を映し出していた…。

「灰原さん、急な引越でもう転校しちゃったなんて…」

「コナン君、灰原さんの引越先知らないんですか？」

「・・・ ああわりい。俺にも教えてくれなかったんだ…。」

コナンは灰原哀が亡くなった後いくらかふさぎ込みの状態になっていた。

居候先の毛利探偵が鳥取での事件依頼があつた際にも同行することなく、阿笠博士の家に泊まっていた。

阿笠博士は気分転換に少年探偵団の三人とコナンを連れてキャンプに出掛けた。

そしてそこで悲劇に巻き込まれることになった。

キャンプで使う薪を集めに行ったコナン達は、阿笠の待つテントに戻る途中、鍾乳洞に入った。中を探検中に、逃亡中の銀行強盗達に遭遇して、コナンは「本来の歴史」と同様に腹を撃たれて重傷を負った。

将棋の駒の動きを用いた出口を示す暗号を少年探偵団の三人が解いて、ようやく警察に保護された頃、コナンは既に意識混濁の状態であり、米花総合病院に向かう救急車の中で息を引き取った。

「コナン君、コナン君・・・」

コナンの居候先の長い黒髪の少女が泣き崩れる傍らで、眼鏡をかけた若い医師らしい男が慰めていた…。

タイムカメラは次々と「別の歴史」の流れになった一部の時間流の様子を映し出していった。

「ごらんのとおり、杯戸シティホテルで時間犯罪が起きた結果、江戸川コナン いや工藤新一は引き続き起きた鍾乳洞の事件で、「本来の歴史」なら九死に一生を得るところを 歴史の舞台から消えることになります。」

「「本来の歴史」で彼は工藤新一の姿で帝丹高校での毒殺事件を解決したことになるようですが・・・。」

「そうだ。彼はこの時初めて灰原哀 いや宮野志保の作ったAPT X 4 8 6 9の解毒剤の試作品を飲んでいる。」

支部長は機密解除された江戸川コナンと灰原哀のデータを読み出していた。

支部長はその場にいるタイムパトロール隊員たちに言った。

「歴史上の記録では工藤新一はある犯罪組織の壊滅に名を残している。そして宮野志保はその犯罪組織で薬物APT X 4 8 6 9を開発し、その時の副産物が後世の時間旅行に大きな影響を与えている。」

「エイシャ錠ですね」

「正常な時間を長い間外れると早く年を取るため、その老化を防ぐ薬。飲みすぎると赤ちゃんになって

しまうという副作用はあるが、我々タイムパトロールの用いている薬品の一つだ。その薬品のルーツになるものを記録に残っている限り初めて作ったのが彼女だ。」

「タイムパトロールはこの事態を修復して「本来の歴史」に戻す必要がある」

3 199X年 タイムパトロール支部 - 2 (後書き)

エイシャ錠の説明は70年代末から80年代前半にかけて藤子・F・不二雄氏が描いた漫画「TPぼん」の中の1話「白竜のほえる山」を参考にしています。

4 199X年 タイムパトロール支部 - 3

タイムパトロールの任務は、人類がたどることができる直線的な歴史進路の監視だ。

歴史の進路を歪めたりしたものは、それによって起こる歴史的变化が帰着する異次元の世界へと戻ってしまい、二度とこの「現在」へは帰ってこれなくなるのだ。たとえば、幼少のナポレオンを殺した者は、歴史上にナポレオンという英雄が全然存在しなかった別の現在に帰ってしまう。

タイムマシン登場直後の時期には航時事故が多発した。航時公安委員会は航時法を公布して事故防止に努めた。

< 航時法 >

第一条 時間旅行者は、歴史の進路を妨害してはならない。また歴史の進路が妨害されるのを看過する

ることによって、歴史の進路を妨害してはならない。

第二条 時間旅行者は、出発した時間的空間的地点に、出発時と同様の諸条件を具備して復帰しなければならぬ。

第三條 時間旅行者は、前記二条に反しない限り、自分の身を

守らなければならない。

一般の時間旅行者の中には、故意に歴史を変更しようとするものも少なくない。タイムパトロールが摘発した、時間犯罪者の中にはかなり詳細に歴史を研究し、歴史変更の計画を実行しようとした者が多い。

そういった時間犯罪の解決のために、タイムパトロールは根拠法の一つである時間管理法に基づいて、歴史の改変を阻止、場合によっては改変された歴史を修復するために、再修正することもあった。

時間管理法第三条では非常措置を講ずる権限を定めていた。

<時間管理法>

第三条 時間監視官は歴史の修正が行われた場合には、当該時点に遡行し、歴史を再修正し正道に戻

すを得る

時間管理法第三条を行使する権限は、よくよくの重大事件にかぎり、ベテランのタイムパトロールのみに許可される特権である。

「時間犯罪者が変えた時間の流れをまず修復することを優先する。灰原哀を回収して、蘇生させる。問題は、その権限を行う者をどう選ぶかだ」。場合によっては身代わりを演じなくては。」

支部長は腕を組んだ。時間流の乱れで21世紀から未来の各時代とは連絡がつかない。199X年より過去の時代にいるタイムパトロールの中から選ばなければ…。

10年単位で設置される一エリアの支部長には重すぎる責任だ。

「歴史が改変された詳しい時点と場所はわかるか？」

「灰原哀が死亡したのは酒蔵の煙突の中を落下した後です。銃による怪我か、子供の姿にまた戻る際のショックのどちらかが決め手になったようですが…」

「煙突の中か、。回収のためのタイムマシンを実体化させるのが難しいな」

「スクータータイプのタイムボートしか進入できそうもありません」

4 199X年 タイムパトロール支部 - 3 (後書き)

「タイムボート」は漫画「TPぼん」で出てきたタイムマシン。
次話は別の時間軸での歴史の再修復作業の段取りを書く予定です。

5 1980年 都内某所 - 1 (前書き)

漫画「TPぼん」に出てくる登場人物3人+オリキャラでコナン世界の歴史再修復作業の段取りを展開していきます。

5 1980年 都内某所 - 1

武蔵野の名残を残す原っぱに、二人の中学生らしい男女が待ち合わせをしていた。

「並平さん、ここでいいの？」

「うん、乗っているタイムマシンのサイズの都合で、未来のタイムパトロール隊員が着くのはこのあたりらしいよ。フォゲッター付けているかな？」

「21世紀後半の現時駐在員で、私たちみたいにタイムボートに乗って、過去未来を行き来するわけじゃないから、制服も装備も持っていないんじゃないかしら。」

二人の中学生、並平 凡と安川ユミ子はタイムパトロール隊員だった。ユミ子は凡がタイムパトロールの正隊員として初めて取り組んだ事件で、通り魔事件に巻き込まれ不幸な死に方をするとところを救われ、成り行きでそのままタイムパトロールに入隊して、彼のパートナーになっていた。

凡の胸元のタイムシーバーからコール音が鳴った。

「凡、久しぶりね」

「リーム、君かい？懐かしいなあ」

「あら、リームさんて、凡の先輩タイムパトロール？」

「今、1960年の北米エリアの支部にいるんだけど、20分くらい後に、凡の家にタイムボートで行くわ。」

リーム・ストリームは2016年のミドルスクール3年の少女。凡の家のそばで行動中に、タイムボートが突然故障したトラブルでタイムパトロールの活動を人の記憶から消すフォゲッターを起動することができなかったために、凡にタイムパトロールの存在を知られてしまい、タイムパトロールの秘密を守るため、凡をタイムパトロールの見習い隊員にした際、彼の指導員になっていた。

凡とユミ子のそばにある草むらのあたりの空間がゆらめきだした。やがて銀白色のタイムマシンが現れて、中から凡たちの時代の流行のスーツを着こなした少し黒の混じった茶髪の若い女性が出てきた。

「安川さんと並平さんかしら？」

「はい ええと 21世紀の現時駐在員の・・・」

「阿笠 愛よ。よろしくね。」

6 1980年 都内某所 - 2

凡の自宅 - ごく普通の建て売り住宅 - の食卓でタイムパトロールの4人が顔を合わせていた。

「タイムパトロールの休暇で私の時代の百年前の197X年に時間旅行に来ていたのよ。」

阿笠 愛は勧められた紅茶を一口飲んで、初めての時間旅行を振り返っていた。

遠縁にあたる発明家が住む米花町の家の敷地にタイムマシンを隠して、所々散策して、夜になって最終目的地の高層ビルの最上階にある展望レストランに入った。

品のいい老ウェイターに巻き毛が特徴的な若い女性が座っているテーブルの横のテーブルに通された。

「あら、藤峰 有希子だね。」

有希子は昼間に時間調整で入った映画館で上映していた映画の女優の雰囲気とまた違った年相応の華やいだ感じを感じさせた。どうも席をはずした誰かを待っているらしい。

愛が注文したケーキセットが届いて、しばらくすると若い女優の座るテーブルにスーツを着た若い男が駆けてきた。彼は席に着いた途端、周りの人にも聞こえる大声でプロポーズの言葉を口にした……。

愛が時間旅行を終えて、元の時代に帰ろうとして時間流に入ったところで、時間犯罪発生に伴う時間流の乱れで未来の世界に戻れなくなったのだった。

タイムマシンにどこからか通信が入る。

「207X年の現時駐在員の阿笠 準隊員だね。199X年で発

生した時間犯罪解決のため、時間管理

法第三条の非常措置を講ずる権限を与える。最寄りの1980年で同行する他のタイムパトロールと合流せよ。」

「了解です。でもいいのですか？私は現時駐在員として連絡役のみ任されているだけです。」

「君にしかできないのだ、それも緊急に。時間犯罪によって命を落としたのは、君の直系の先祖の一人だ。それに改変された「別の歴史」の流れが強まれば、君自身が消えてしまう。」

愛は彼女が生活する世界では1年前に大往生した曾祖母の志保大おばあさんが、今回の時間犯罪に巻き込まれていたを知った。

愛にとって、曾祖母の志保の思い出は、セピア色に変色した何枚もの写真を懐かしそうにながめている姿だった。丸みを帯びた自動車をバックに小学生5人が写った写真、眼鏡をかけた少年とのツーショット

等々……。

愛が小学校に入る前後のころ、はじめて志保大おばあさんが「お気に入り」のセピア色の写真を見ているのを見た時、無邪気に質問したものだった。

「大おばあちゃんが私と同じくらいの年のころの写真ね」

「そうね 子供のころの写真ね。二度目の」

「二度目？」

「10年経って、愛がいろいろ勉強して、物事をよく理解できるようになった頃、まだ私が生きていたら教えてあげるわ。」

「この眼鏡の男の子と映っている写真が多いけど、とても仲が良かったの？」

「・・・さあどうだったかしら。」

「もしかして大おじいちゃん？」

「さあ・・・」

愛はふと10年以上前のことを思い出した。あのセピア色の写真が写された時代に行くことになるとは…。

「阿笠さんは、今回の時間犯罪で命を落としたこの茶髪の女の子はよく知っているの？なんか顔の雰囲気とか似ているんだけど…」

愛の真向かいに座る3つほど年下のリームが話しかけてきた。

火事が起きた酒蔵の煙突しかタイムマシンを実体化できる空間がないため、タイムボートを垂直に時空連続体が強い圧力を受けないよう若干の時間差をつけて同一空間で実体化する必要があった。

リームは最初に実体化して本来は死ぬはずでない少女を回収して、いったん蘇生・治療設備のあるこの1980年の支部に搬送する段取りになっていた。

「ええ、この女の子、私の曾祖母にあたるわ」

愛が中学校に上がるころ、彼女の両親が勤め先の研究機関の都合で月面都市に引越した。その後は志保大おばあさんと二人暮らしをしていた。曾祖母が薬学系の研究者だったことを知ったのはその頃だったか、15の年に今後の進路を決める際、薬学系の特待コースの進学を選んでいた。

進路を薬学系に決めた前夜、愛は志保大おばあさんに今後の進路のことなどを話していた。

「愛、私と同じように薬学系の勉強をするのね。いい。私みたいに犯罪組織に利用されるような研究はしないのよ。」

「犯罪組織って、大おばあちゃん？」

「大おばあちゃんの両親はどちらもある犯罪組織の研究者だったの。物心つかない小さいころに二人とも亡くなって、私は外国に留学していたのよ。」

「じゃあ、あの写真って？」

「私が研究開発中だった薬を暗殺用に使われたことがあったの。死体から毒が検出されない、完全犯罪が可能なAPTX4869という薬。ある日、ある高校生が事件に巻き込まれてその薬を飲まされたの。」

この写真の眼鏡の男の子が、その高校生よ。偶然、幼児化したのよ。」

「そしてこのかわいげのない女の子が私。この子が幼児化して生きていたことを知った頃にお姉さんが組織に殺されて嫌になってね。死ぬつもりでAPTX4869を飲んだのよ。」

「だからこの写真は二度目の子供のころの写真よ。」

「あの人には、私と初めて会った頃とても憎まれたわ。無理もないわ。大好きな幼馴染と離れ離れになってしまったんだから。」

「結局何度か解毒剤の試作品を彼のために作って、あの組織を潰す直前に完全な解毒剤が完成して二人とも飲んだのよ。」

「愛、この男の子と私がA P T X 4 8 6 9を飲んでほかの人と違って幼児化した理由は想像できる？」

「高校生だったということは第二次成長期だったからかしら？」

「そうね。後から思うと、第二次性徴から大人の体になる時期で、性ホルモンの分泌が影響していたよ
うね。」

曾祖母の志保は目をつむって、黒の組織を壊滅させる数日前のことを思い出していた。

「完全な解毒剤ができたのか。」

「ええ、これを飲んだら、元の体に戻ることができるわ。」

彼を見ると元の体に戻る喜びで少し上の空になっていた。

「これまで何度も試作品を使ってきたこともあって、耐性ができてしまっている以上、工藤くんが解毒剤を飲める機会はそう多くないわ。あの時、ロンドンに行くのを反対しておくべきだったかしらね。結局有希子さんに渡した予備の解毒剤も使うことになったし。」

「解毒剤を飲んでから、とても大事なことを一つ試さなくてはいけないわ。」

「灰原、それはなんだ・・・」

「元の体に戻ったあなたの生殖機能のチェックよ。わかるでしょう？ セックスよ。」

「そっそれって・・・」

「何赤くなっているの？名探偵さんも年相応の男の子だったのね。」

「あっあのな。さらりと言っなよ・・・。」

「これは検査なのよ、工藤くん。私を抱いて」

組織を壊滅させる前夜、元通りの姿を取り戻した二人はお互いを求めあつた。

「お願い、工藤くん。志保と呼んで。何もかも忘れさせて。」

「志保っ」

組織の壊滅後、あの人は私とのことは忘れて、長い黒髪の幼馴染みのもとへ帰ると思っていた。

なのに、あの人は・・・。

彼は、この世でたった一人、同じ境遇を分かち合える相手を手放す選択をしなかった。

「1960年の支部の備品庫からこの薬品を持ってきたわ。私や凡が飲んだことのあるエイシャ錠の元になった薬品 SIN-1-AI-3 よ。」

「この薬を私が飲んで、大おばあちゃん、いえ 灰原 哀が蘇生するまで、彼女に成りすますのね。」

「ええ、薬の効き目は長くて1週間。トラブルはないに越したことはないけど、長くてそれだけの期間 彼女に成りすますことになるわ。」

「現地に着いたら、すぐに薬を飲んでね。タイムロックをかけてなるべくスローモーションで着地させることになっているけど、その前に傷も再現しないといけないのね・・・」

愛をタイムボートに乗せる予定になっているユミ子はタイムボートの圧縮学習法の装置から電極を引いて、愛の額に着けた。

「阿笠さん、周辺情報も含めて情報の整理をしましょう。」

電極から頭の中に情報がほとばりだしてきた。

8 1980年 都内某所 - 4 (後書き)

A P T X 4 8 6 9 を飲んだコナンと哀が幼児化しつつ生きていることの考察は今から8年前に発行された「オフィシャルブック コナンドリル」に記載されたものを参考にしています。原作でいえば40巻くらいまでの範囲で、今の原作の進行具合と比較するとテンポよく話が展開されていたころですね。

S I N - 1 - A I - 3 は 「名探偵コナン特別編」で出てきた灰原が作ったある薬の名称から解毒剤名として選んでみました。

9 199X年 灰原哀の危うい立場 - 1

タイムボートの集中学習法の機器につながった電極から、杯戸シテイホテル事件前後の灰原哀の周辺情報が、愛の頭の中に洪水のように流れ込んでいた。

灰原哀 いや 宮野志保は この時期人生で最も脆弱で難しい時期を迎えていた。

この時期、「黒の組織」でコードネーム「シェリー」の名前を与えられた宮野志保は、残された肉親である姉 明美を殺され、天涯孤独になっていた。組織に反発して研究をボイコットしていたが、ガス室に閉じこめられ、手にしていた開発研究中の薬物 APTX 4869 を飲んで自殺しようとしたところ、偶然幼児化し脱出した。実験データと事後調査の結果、幼児化して生きていると思われた工藤新一を頼って、米花町へ逃げ、工藤邸に着く間際に倒れてしまい、阿笠博士に保護された。やがて同じく幼児化して江戸川コナンと名乗って帝丹小学校に通っていた工藤新一をならって、灰原哀の偽名で阿笠博士の家に居候した。

ようやく会うことのできた、工藤新一 いや幼児化した江戸川コナンとの最初のコンタクトは最悪だった。幼馴染の元に元の姿で早く戻りたいコナンの負の感情が彼女に対して爆発してしまったのだ。この時期彼女はだれよりも孤独だった。

だが時の流れは、二人の距離を縮める方向に作用しつつあった。競技場無差別脅迫事件以降、少年探偵団の一員として関わる事件で、彼女はコナンのサポート役を自然と務めることになった。

探偵として事件の解決を焦る彼を落ち着かせたのも彼女だった。

「あせっちゃダメ。時の流れに人は逆らえないもの。それを無理矢理ねじ曲げようとすれば人は罰

を受ける・・・」

コナンは工藤新一だった時、幼馴染に対しても素直に弱い自分を見せることなく「かつこいい」面ばかり見せていたことが、反動となったからか、幼児化して自分の自信を大いに失う経験をした結果、無意識のうちに彼女に対して、本音を吐露するようになっていた。

そうした彼の無意識な甘えを、哀は自然に受けとめていたが、一方で彼の本来の幼馴染の存在が、影を落として彼女は罪悪感を感じていた。

科学者としての面でも必要なデータが揃わないと解毒剤を作ることができないことを理解しているこの時点ではまだ解毒剤の試作品すら作る目処が立っていなかった。

10 199X年 灰原哀の危うい立場 - 2

「本来の歴史」において、灰原哀が今回の杯戸シティホテル事件で助かることでパイカルの成分を基にした解毒剤の試作品を作ることが一つの薬物の開発だけでなく後の歴史に大きな影響を与えていた。

コナンは後に解毒剤の試作品を帝丹高校の学園祭の事件の前に服用することで一時的であれ元の姿に戻ることができたことが将来への希望につながり、さらに犯罪組織「黒の組織」の壊滅の思いを強くさせていた。

愛は今回の時間犯罪で一番の利益を得るのは誰になるか考えていた。

灰原哀がAPT X 4869の解毒剤を完成するきっかけさえつかむことなく死亡し、コナンが引き続き起こる鍾乳洞での大けががきっかけとなった事件で命を落とすことにより、利益を得るもののこの時代であれば「黒の組織」と呼ばれた犯罪組織か……。

APT X 4869を飲んで偶然幼児化する事例を20世紀末のこの時期もし彼らが知れば、どう犯罪に

使われたか、そして社会が混乱したか……。APT X 4869とその解毒剤のデータは、志保大お婆さんが大往生した後、遺言で地球連邦政府の科学局に提出され、高い機密レベルで保管されることになったことを愛は覚えていた。破棄したはずの薬物のデータを半世紀以上振りに復元する作業を行った際、時間犯罪者に二人とも襲われかけたところをタイムパトロールに助けられたことが、愛がタイムパトロールに関わるきっかけになっていた。

タイムパトロール支部内の取調室で、時間犯罪者が取り調べを受けていた。

時間犯罪者（彼らは時間改变者と主張したがる）は今回の時間改

変での目的を199X年からそう時を置かない間に壊滅した「黒の組織」の存続であったと白状していた。

「組織を壊滅させるのに大きな功績を残した工藤新一が幼児化したままの状態で、十分な活躍ができない状態で21世紀を迎えさせようとした。」

「APT X 4869の解毒剤を飲む機会がなければ、コナンが彼の幼児化した姿だと信じる者ははるかに少なくなり、FBIをはじめ世界各国の警察権力が協力することはなかった。」

「この時点で、灰原哀を消すことが、コナンの元の姿に戻る希望を失わせ「黒の組織」の活動を加速させると考えた」

2台のタイムボートは乱れた時間流の流れに煽られながら、199X年の事件があった時点に向かいつつあった。

コナンはホテルのフロントまで来て焦っていた。

「早く酒蔵の場所を知りてえのに…」

地方から出てきたらしい中年のおばさんに急に割り込まれて、フロントの担当者は応対に手間取っていた。

灰原哀がパイカルを飲んで一時的に宮野志保の姿に戻って酒蔵の暖炉から煙突をつたって屋上に向かっていている途中だが、複数の建物からなるこのホテルでどの建物の屋上に出るかまだ特定できていなかった。

さつきジンとウォツカが、酒蔵に来てすぐに出て行ったようだが、もしかしたら屋上へ向かっていたかもしれない……。もし鉢合わせしたら……。

コナンは、ふと右肩を叩かれた。

「どうしたの、ぼく？」

見ると宴会ホールで灰原に声をかけたこのホテルの従業員だった。眼鏡を取っているからかさつき会っていたことは気がついていないようだ。

「おねえさん、このホテルで酒蔵はないの？」

「えっ酒蔵？」

「うん 大きな暖炉がある部屋だと思うんだけど…」

「もしかしてもうすぐ改装する旧館じゃないかしら…。」

「旧館？」

「ええ どこかの部屋を物置にしているらしいわ」

コナンは旧館に向けて走り出した。

酒蔵の暖炉のある空間に接続する時間流で2台のタイムポートが待機していた。

安川ユミ子の操縦するタイムボートに跨りながら、愛は背中に付けた銃に撃たれてできる傷に似せた傷からのかすかな痛みを感じていた。局部の痛覚を抑える薬品もS I N - 1 - A I - 3を飲む時に飲んでいたのだが、完全に痛むのを抑えきれないようだった。

「代役になつていて間の記憶とかどうするの？」

「蘇生手術が終わった際に、記憶に関する部分を一部移転して無理がないように操作するようね。」

「瞬間治療剤0・1単位のカプセルを、灰原哀の赤いランドセルに念のためにいくつか後で空間転送しておくわ。徐々に回復してきたと思わせる方が自然でしょうし。」ユミ子は古代ローマ時代の小アジアの

病院で一人の少女の命を助けた時の対処法を思い出しつつ言った。

「あの発明家さんが、あたふた右往左往するでしょうけどね」

灰原哀は江戸川コナンともども、「黒の組織」から身を隠して大人が幼児化した姿であることは秘密にしないでほらないため、まともな社会保険サービスが受けられない状態だったはずで、病院に駆け込むとは考えられなかった。

愛が灰原哀の代役に選ばれた理由は、その姿かたちが彼女の子孫だったためか髪の毛の色を除いて瓜二つだったからだだった。時間管理法第3条の非常措置を行うことを決めているとはいえ、時間犯罪が行われた時点の現時の人々に紛れて潜入行動をするのに、今回は子供の姿になるだけでなく、現時の人々と直接接触する必要もあり、事件解決後タイムパトロールが退去する際に、フォゲッターで記憶から選択的に忘れさせることができるとはいえ、周りに違和感を与えるわけにはいかなかった。

「本来は、時間犯罪解決にあたって100年未満の時代間で直接の親族同士顔を合わせるのはまずいのだが、中央コンピューターが199X年より前の時代にいるタイムパトロールでこの任務を行う

のものにもっとも適した人材を阿笠 準隊員と選んだ。時代に影響を与えないように、同時代の親族等にあまり特別な感情を持たれる行動はとらないように。」

199X年のタイムパトロール支部長からの通信内容を愛は思い出していた。

「本来の歴史」どおりに、小学生（実際の中身は高校生）の男の子に背負われて酒蔵に使われていた部屋から火事になる前に出るようになっていいるのね。問題があるとしたら、彼に「本人でない」と気づかれないようにすることね。観察眼が強くても体とかジロジロ見られる様な時間はないと思うけど・・・。

モニターにはホテル旧館屋上でツナギ姿の宮野志保が後ろから撃たれて、二人の黒づくめの男と向かい合ったところだった。

11・199X年 灰原哀の危うい立場 - 3 (後書き)

時間犯罪者が、歴史改変をした場面を少し何気なく入れてみました。
そのあとで、タイムパトロール側で修復作業をさりげなくしている
わけですが…。

旧館の屋上に向かうコナンのイヤリング型携帯電話が鳴った。

「銃声？」

「始まったわ」

リームはモニターを見つつ時間の流れを停めるタイミングを待った。

普段は歴史の流れに影響しない人の命を助けるのが主な任務で、助ける対象について感情に流されてはいけないことは、頭でわかっ
ていても人が傷つくのを見るのは愉快なことではない。黒づくめの
服の背の高い方の男がサイレンサー付のリボルバーで今回救出対象
の女性の体の節々に発砲をして、血のにじんだ雪の上に彼女は倒れ
こんだ。

「送ってやるか 姉の元へ」

ジンは改めてシェリーにリボルバーを向けた。

そろそろ、小さな少年が屋上に着くころだ。黒づくめの男たちが
屋上に誰かが上がってくる気配に身を隠した隙に、今回の救出対象
の女性が煙突から落下するはず・・・

なのに黒づくめの男達は男達は階段から近づく人に気が付いてい
ないようだ。

「おかしいわ。小さな男の子が来ない。」

コナンは小さい我が身を呪った。すぐ上の階が屋上だというのに、
重い鉄扉がびくともしない。彼の探偵団バッジは灰原に渡した眼鏡
のスピーカーから容易ならざる状況であることを受信していた。

「灰原を早く逃がさねえとまずい。」

まだ彼ら二人はジン達に正体を知られるわけにいなかった。

コナンは後ろから学生服を着た中学生がこちらに歩いてくるのに気づかなかった。中学生は扉を開けようとやっきになっている少年に首をかしげて、屋上で雪だるまでも作るのだろうと思ったか、鉄の扉を開けてやり、ストッパーで留めた。

「ありがとう、おにいさん。」

コナンは子供の演技をして声をかけて屋上に向かった数瞬後、助けてくれた人のことは忘れていた。

「フォゲッター起動しているから、問題ないかな。」 時間流に
いるルームへ、タイムシーバーを取り出し、学生服の中学生・・・
並平凡は連絡をした。今昔の二人のパートナーが今回の歴史修復作
業に参加する一方、凡はバックアップにまわっていた。

コナンは旧館屋上の扉の陰から時計型麻醉銃で大人の姿の灰原を
撃とうとするジンの右腕を撃った。

「ア、アニキ？」

ウオツカは右腕を押さえ、座り込んだジンに心配そうに声をかけ
よった。

「煙突だ。煙突の中に入れ」

屋上の扉から不意に男の声が聞こえてきた。それはコナンの蝶
ネクタイ型変声機を用いた声だった。

「誰だ、てめえは。」

ウオツカはとっさのことで3発、「声をかけた男」の方にサイレ
ンサー付リボルバーを発射した後、煙突から下へ逃げようとするシ
エリーに1発発射して、煙突から落下していくのを確認して、また
ジンに駆け寄っていた。

体の節々をジン達に撃たれ、ようやくのことでたどり着いた煙突から下へ降りようとするとところで、更に1発撃たれて、灰原哀は意識が薄れた状態で酒蔵に用いられた倉庫に落下していった。

煙突の狭い空間にリームの乗ったタイムボートが煙突に沿う形で逆立ちをした感じで実体化した。

「タイムロック」

タイムコントローラーを使ってリームは時間の流れを止めた。

何発も銃に撃たれた灰原の姿を見てリームは顔をしかめた。銃が当たり前の地域・時代の出身で免疫があるとはいえ、銃で死にかけた人を見るのは抵抗があった。最後に撃たれた首筋あたりの傷を確認した。

少し煙突から落下したのが遅れたからか、首をかすめて右肩の後ろに当たるはずの銃弾が首に当たった直後に時間流の流れから外れて何もない空間に止まっていた。

「瞬間治療剤を少し打って、移送しないと・・・。」

リームは必要な措置を手早く済ませると、灰原哀を後部座席に固定して、時空連続体に移動した。

時空連続体に待機していたもう一台のタイムボートがリームのタイムボートに並んだ。

「阿笠さん、灰原さんと入れ替わる準備をして。携帯している小物は身に着けてね。」

愛は眼鏡とつなぎに入っていたMOをリームから受け取った。

「彼女、大丈夫なの？」

愛は曾祖母にあたる灰原哀を心配そうに見た。ここで彼女が亡く

なってしまうと自分は消えてしまうのだ…。

「弾の一つが首筋に当たりかけていて、瞬間治療剤は打っておい
たけど……。あとは1980年の

支部にある蘇生施設で検査をしてもらわないと…。」

「その眼鏡から電波が出て通信できるようだから、声を立てるのは
気を付けてね。」

「タイムシーバーはランドセルの中のこの子の携帯に期間限定で
ダウンロードしておくけど、周りの人に怪しまれないようにね。・
・」

突然愛の体内に痛みと熱さが駆け巡った…。S I N - 1 - A I
- 3 の効果が出始めたのだ。

幼児化する直前で愛を煙突から暖炉に落とすタイミングをタイム
ボートのセンサーで確認していたユミ子が、少し驚いた様子で声を
かけた。

「阿笠さん、大丈夫なの？」

「骨が溶けるような熱さだわ。しばらくしたら、体が幼児化する
みたいね。急いで。」

「わかったわ。ショックがあまりないようにスローで落とすから。」

ユミ子のタイムボートが時空連続体から煙突の狭い空間に移動し
て、コマ送りで愛を自由落下させた。

「急いで離脱しないと。上の二人がしばらくしたらこの煙突に来
る…。」

タイムボートを再び、時空連続体に移動させ、煙突の上、ホテル
旧館の屋上をモニターすると、黒づくめの背の高い方の男が携帯電
話に出ようとしているところで時間の流れから外れて物言わぬ彫像
になっていた。

ユミ子は、愛が煙突の一番下に到達したのを見計らって、タイム
コントローラーのロックを解除した。

愛は暖炉に落ちて鈍い痛みを体全体で感じたすぐ後、心臓に強い痛みを感じ体の幼児化が急に進行した。ついには痛みに耐えきれず、悲鳴を上げ、そのまま気を失った。

「すばらしい。」

気を失い、つなぎにぶかぶかの状態でくるまっている幼児化した愛を見下ろす老人の姿があった。

ホテルで行われていた「酒巻映画監督を偲ぶ会」に参加していた榊山憲三 いや黒の組織のメンバーのピスコだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0388q/>

異聞 坏戸シティホテル事件

2011年2月25日00時20分発行